研究発表

『浮雲』の主人公文三は余計者であろうか

Is the hero of *Ukigumo* an outsider?

LE CHUN KIM*

Scholars of Japanese literature have well compared the similarities of Utsumi Bunzō and the characters of Ivan Turgenev, the outsiders of Russian literature. In *Nihon bungaku-shi jiten* [Dictionary of the history of Japanese literature] Bunzō is termed the first outsider in Japanese modern literature.

However, I am opposed to simply characterizing Bunzō as similar to the outsiders found in Russian literature. Is Bunzō really endowed with the representative character of the outsider?

And, furthermore, did Futabatei Shimei try to present the problem of a Japanese outsider in *Ukigumo*? In order to answer this question it is first necessary to elucidate Futabatei's thinking about outsiders. Russian critics regard the outsider as in essence a psychological and social type born out of conditions under the autocratic system of serfdom. In contrast, Futabatei thought of outsiders as being born out of the instability of Russian culture after the reforms of Peter the Great. However, the important

* LE CHUN KIM 〔現職〕 ソ連邦科学アカデミー世界文学研究所上級研究員

thing is that the situation in Japan at that time was not as yet such for the formation of the artistic type of the outsider. It is too early to talk about outsiders in the Japan of just after the Meiji Restoration. The main theme of this work is nothing more than the portrayal of the suffering of an ingenuous youth who goes to the big city during the period of the birth of capitalism and is ruined. In Bunzō's question, "What should I do now?", is contained the beginning of the spiritual quest in modern Japanese literature.

二葉亭四迷の『浮雲』は、日本の批評界の一致した意見によれば、日本文学における批判的リアリズムの発達の礎となった。この小説の思想的、芸術的特殊性は、ロシアの文豪たちの創作と緊密な関連を有している。『浮雲』執筆後、二葉亭は自己の小説とロシア文学のつながりを特に強調している。「作の上の思想に露文学の影響を受けた事は拒まれん」と彼は書いている。

二葉亭は自分の小説の構想を次のように定義した。即ち、封建制の崩壊した移行期にある日本の生活の正しい情景を再現し、日本の新しいブルジョア文明の裏面を示すことであると。作者は、社会的圧迫に押しつぶされた〈ちっぽけな人々〉の運命に特別の関心を寄せた。小説の主人公、内海文三は、資本主義の生んだ悪を身をもって体験する。

『浮雲』については尨大な研究文献が書かれた。今日までこの小説について学術上の論争が絶えない。それは、作者の構想の正確な理解、書物の独特の構成、かつまた二葉亭とロシア文学の創作上のつながりの特質に関する論争である。

日本の文芸学者は、内海文三の形象とロシア文学の〈余計者〉、即ち、トゥルゲーネフのルーヂンやゴンチャローフのラーイスキイとの類似性を繰り返

し指摘してきた。文学史家瀬沼茂樹は、文三とオブローモフの対比すら行なっている。「文三とオブローモフは異母兄弟である[注1]」と。

日本の文芸百科事典は、同種の出版物が概してそうであるように、もっとも定着した評価に依拠しているが、二葉亭論では次のように述べている。「主人公文三は日本近代文学における最初の余計者である。文三の形象が最初ツルゲーネフまたはゴンチャローフの主人公からのヒントによって企てられたと想像することもできるが、しかし描かれた文三は日本社会の余計者である[注2]。」

このように文三と、トゥルゲーネフ、ゴンチャローフの主人公を対比することは、議論の余地があるように思われる。実際、〈余計者〉のいかなる典型的特徴を、文三は持っているのだろうか？　二葉亭は自己の小説の中で、日本のルーヂンとラーイスキイを創造しようとしたのだろうか？　あるいは、もしかすると、文三はドストエーフスキイの『虐げられた人々』により近いタイプなのではないか？　この問いに答えるためには、まず第一に二葉亭が〈余計者〉をどのように理解していたかを明らかにしなければならない。

「ガンチャロフの小説」という副題を持つ論文『露西亜文学談』の中で、二葉亭は次のように述べている。「……ペチョウリンとグリボエードフの『智恵のわづらひ』中の主人公チャツキ、プーシュキンが詩で書いた有名な小説の主人公オネーギン、ツルゲネフのルーヂン、こんな成功したと云はれて居るものが沢山あるが、皆んなこれらは大の懶惰者のオブロウモフが、何事をするのもいやだといふので、毎日朝から晩迄寝床の中へころがって居るのと同じ型の人物だ、……。各々天賦の才能は持って居ながら、どれもこれも真の仕事を見出す事が出来ない。自分の精神を全く打込んで身を入れて働かうと云ふ仕事を見つける為に、ああでもないかうでもないと、考へ盡し求め盡して、終に一生の間見附からないで、ある者は自暴自棄となり、或者は懶惰になる。[注3]」この二葉亭の文章は、エヌ・ア・ドロブロリューボフの論文『オブローモフシチナとは何か？』と直接に呼応している[注4]。

しかしながら、この〈余計者〉のタイプはいかにして文学に発生するのだろうか？　彼らの社会的本質はいかなる点に存するのか？　この問いに対する二葉亭の答えは、ロシアの（革命民主主義的）批評家の立場とはかなりかけ離れたものとなっている。二葉亭の語るところによれば、〈余計者〉はピョートル大帝の改革の産物なのである。「大帝は国粋とか国風とかを少しも考へないで無闇に大ハイカラの西欧文明を其儘採入れた。此新旧の思想が未だ融和しないできまりがつかないから、今日迄うろうろまごついて何んにも出来ないルーヂンのやうな性格を生んだのである、自分の国で永く生立った国風が異った性質を持って居る国風をいきなり押附けられた為に、古く固定した信仰はなくなったが、新らしい信仰は得られない、即ち人心の中心となるべき物はない、其中心を非常に追求して終に得られない処から、寝台から起上がるのも面倒くさいといふオブロウモフのやうな者も出て来るのだ。(注5)」

トゥルゲーネフのルーヂンの落着かぬ気性は、二葉亭によれば、ピョートルの改革後のロシア文化の不安定性に起因しているという。ここから『うき草』という、この日本作家が長編小説『ルーヂン』の翻訳につけた表題が出てくるわけである。

ドブロリューボフが〈余計者〉を、独裁制・農奴制機構の情況が生んだ一定の社会・心理的タイプとして示せば、二葉亭はそれを土地主義（ポーチヴェンニチエストヴォ）の問題、ウラブ派と西欧派の闘争と結びつけた。従って、決断力のなさと自信のなさ、絶えざる心の疑惑、といった文三の性格の特徴は、普通この日本の主人公と〈余計者〉の類似性の証拠として挙げられるけれども、実は別の社会的起源を有しているのである。

もう一点重要なのは、当時の日本の現実は〈余計者〉の形象を芸術的に具現するための材料をまだ提供していなかった、ということである。文学は現実の生活に比して、あまりに先走ることはできないのだから。

『浮雲』の創作時期とその事件展開の時期は、明治維新後第２の10年間のことである。この頃、新しいブルジョア体制の創造的可能性という幻想がま

だ拭い去られぬ一方、資本主義の道を歩み始めた日本の社会的矛盾は既に顕在化しつつあった。従って、我々の見る所、ブルジョア制の環境出身の〈余計者〉を云々することは、つい最近明治維新を為し遂げたばかりの当時の日本にとって、時期尚早なのである。

では二葉亭の小説の根底に込められた主要イデーとは、どのようなものであろうか？　前記『露西亜文学談』の中で、二葉亭は次のように述べている。「丁度『浮雲』をかいた時代は大にこれ〔ゴンチャローフの『断崖』〕に惚込んで居た時であったから、……この文体を再顕(レプロデウス)しようとして随分馬鹿気た苦労をやった。(注6)」

長編小説『断崖』の問題はスラヴ派と西欧派の闘争のプランにある、と二葉亭は考えた。彼はラーイスキイに、つまり〈余計者〉の形象に注意を払わなかった。彼の興味を惹いたのは、滅び行くロシアと新しいロシアを代表する人物、即ち祖母のベレシュコーヴァとヴェーラとマルク・ヴォーロホフだった。真に「進歩的露西亜を代表する」のはヴェーラである、と二葉亭は考えた。「これは気質も気高く純潔で古露西亜の善良な気質を持って居ても、自由を重ずるのだから慣例などを顧りみない。常識が豊富で、慎重な態度をとって平然と世に立たうと云ふ女である。……以後露西亜の践むべき道はヴェーラの自由主義に外ならぬと云ふ結論……に達する所が妙だ。(注7)」

古風な伝統の擁護に、二葉亭はヴェーラの自由主義を対置した。日本作家の『断崖』観は、速やかな〈近代化〉の道を歩み始めた、19世紀末日本の歴史的過程に意義づけをしようという、彼自身の欲求を反映している。二葉亭は自己流に解釈した『断崖』の思想内容を、当時の日本の現実に当てはめようとしたのだった。

二葉亭は当初の構想に従って、若い解放された娘、〈新教育〉を受けたお勢の形象に、そしてその周囲の生活に対する態度に多大の注意を払っている。何人かの日本の評論家がお勢を小説の主人公とみなしたのも偶然ではない。しかしながら、新旧の衝突というテーマは、小説の唯一最大のテーマとはな

らなかった。それどころか、この書物の当初の構想は、以後の物語で徹底的な展開を見なかった。小説の中心には新しい思想が浮かんでくる。即ち、平凡な人間の幸福などありえない、ブルジョア制の現実の裏面を示すことである。『浮雲』創作の時期に日本の大都市で、かつての小官吏が所謂行政整理の結果、解雇されることは珍しくなかった。二葉亭はこの権力の専横の犠牲者に注目し、これを小説の主人公としたのだった。このように物語が社会批判に力点を置く方向に移行する際、二葉亭はドストエーフスキイの創作体験に目を向けたのである。

二葉亭は自己の小説の文学的ソースを一度ならず挙げている。1888〔89〕年、『浮雲』最終篇に精力的に取り組んでいた頃二葉亭は、日本文化の活動家に〈愛読書〉を尋ねた雑誌『国民之友』のアンケートに答えて、ゴンチャローフの『断崖』とドストエーフスキイの『罪と罰』を挙げた。覚え書「作家苦心談」(1897年) で、彼は次のように書いている。「第1回は三馬と饗庭さん(竹の舎)のと、八文字屋ものを真似てかいたのですよ。第2回はドストエーフスキーと、ガンチャロッフの筆意を模して見たのであッて、第3回は全くドストエフスキーを真似たのです。(注8)」このことについては、論文『予が半生の懺悔』(1908年) でも触れられている。

この作家の発言は、執筆が3年間続いた小説の創作意図の進展のもつ性格に光を投げかけている。当初二葉亭は、式亭三馬 (1776—1822年) のような江戸の戯作者の芸術的手法を用いて、新文明に〈感染した〉移行期の日本社会の風俗習慣を描き出すつもりだった。『浮雲』という小説の名自体、明治維新期の日本の生活の不安定さと動揺を連想させた。ゴンチャローフの『断崖』が、このテーマを思想的に掘り下げるのに一役買ったことは疑いない。この書には二つの世代、新旧イデオロギーの闘争が認められる。

しかしながら、後に小説の主要課題となるのは、現存機構が人間の人格に及ぼす影響を分析することである。物語の中心に進み出てくるのは、社会的不公正の犠牲となった小官吏、文三である。新旧イデオロギーの衝突は後方

に退いて、この作品の社会的背景となる。

かくして小説の第一篇と第三篇の間には、創作意図の複雑な進展が生じた。加うるに、文学的影響も種々様々であった。二葉亭自身の告白によると、小説の当初の構想がひどく変わってしまったので、執筆の終り頃には、『浮雲』という表題に込めた思想をどうしたものかと頭をかかえたという。

内海文三は地方の身分の低い侍の息子である。父は明治維新後零落したが、自分が手仕事をするわけにはいかぬという考えで、家族を赤貧洗うが如き身にしてしまった。父の死後、15歳の文三は東京の叔父のもとへ移った。叔父は地所の投機で富裕な身分になったが、文三はその扶養で暮し、居候の身分たることの、ありとあらゆる屈辱感と悲哀を味わった。首都で文三は首尾よく官立学校に入学し、その後小官吏として就職した。彼は2年間仕事に励み、万事倹約して金を貯えた。そして小さな家を買って、田舎から年老いた母を呼び寄せようと決心した。正にそうすることによって、彼は息子としての義務を果すことができ、母と子は幸せに暮す——平凡な人間の平凡な夢である。しかしながら二葉亭は、最初の人員削減で文三が解雇されるところから、小説を書きおこしている。文三は天性正直なので、上役に取り入ることができなかった。叔母のお政は、出世にとって教育は必要と考えていたが、手の平を反したようにこの失敗者に対する態度を変えてしまう。お勢は解放された女性にふさわしく、自分から文三に恋を打ち明けたが、その彼女が急に彼に冷たくなってしまう。物語の主要テーマとなるのは、地方出身の青年の精神的苦悩であって、彼は資本主義制の都会で出世しようという幻想の崩壊を身をもって味わう。正にここで『浮雲』とドストエーフスキイの社会小説の問題との接触点が生ずるわけである。

文三は社会的抑圧に打ちひしがれた、〈ちっぽけな〉人間である。彼は、高遠なテーマを華々しく論ずるルーヂンやラーイスキイのような〈美辞麗句の輩〉とは似ても似つかない。文三は内向的で臆病で、自分の考えを決してはっきりとは言わず、黙って自分の十字架を背負っていく覚悟である。

この点で意義深いのが、「叱るよりは謝罪る方が文三には似合ふ」[注9]という作者の言葉である。

『浮雲』の劇的な衝突は、2、3の研究者の言う、文三と旧イデオロギーの軋轢にあるのではなく、資本主義社会が文三のような人間を容赦しないという点にあるのだ。それ故、小説の思想概念全体を理解する上でこの上なく重要なのは、文三とその同僚本田昇のアンチテーゼである。昇はめかし屋で如才ない立身出世主義者であり、とんとん拍子に行く若い官吏であって、資本主義の強欲な本質を擬人化したものである。正直への志向と、理想的なるもののシニカルな蹂躙、これが二葉亭の小説全編を貫く矛盾である。そしてまさしくこの点に、この日本作家とドフトエーフスキイの新しい〈呼応〉が見出されるのである。

言うまでもないことだが、このロシア作家の影響は二葉亭の小説において、直接的な形をとっては現れていない。二葉亭は『浮雲』執筆時『罪と罰』の影響下にあったにもかかわらず、『浮雲』はイデー上もプロット上も、『罪と罰』とはひどく異なっている。だが双方の作品ともにブルジョア制の苛酷さが暴き出され、人間天性の無垢と資本主義社会の冷酷さの対照の上に、劇的な衝突が成り立っているのだ。

ロシア作家の創作体験は、二葉亭の小説の社会的傾向を強化したのみならず、人間心理の複雑さをより鋭く見つめるよすがとなった。二葉亭は前記覚え書「作家苦心談」の中で、ドストエーフスキイ特有の、人間の内面世界を洞察する力に特に注目している。「ドストエーフスキーとツルゲーネフとは、——と彼は述べている。——此の二様の観世法を代表している気味があります。前者は作者と作中の主なる人物とは殆ど同化してしまって、人物(キャラクター)以外に作者は出てゐない趣がある。後者は作中の人物(キャラクター)以外に作者が確に出てゐる趣がある。幾分か篇中の人物を批評してゐる気味が見える。…何となく離れて傍観してゐる様子があります。約めて云ッて見れば、直ちに世の実相の真中にとびこんで、其れから外囲の方に歩を進めてゆくのと、外囲の方から次第

次第に内部の方に這入ッてゆくのと、二通りあると思はれるんですよ。私は今のところでは直ちに作中の人物と同化して仕舞ふ方が面白いと思ッて居ます[注10]」。

ドストエーフスキイの心理主義、人間の内面世界を洞察し、〈虐げられた人々〉の苦痛にみちた体験をきめ細かく伝える能力は、日本作家にとってこの上なく貴重な教訓だった。

ドストエーフスキイの創作体験をよりどころとして、二葉亭は『浮雲』の中で、日本文学にとって根本的に新しい主人公を登場させた。当時まだ依然として支配的だった〈勧善懲悪〉の伝統的規範は、文学を死した図式と化し、主人公を儒教の美徳の代弁者、独立した内面生活を欠くマネキン人形としてしまっていた。二葉亭は決然として旧来の伝統と袂を分かち、「考える」社会的主人公のタイプを創造して、その心理を明らかにしたのだった。

二葉亭は『浮雲』第三篇を、傷つけられた人格の精神的苦悩を描くことから始めている。その冒頭はこうである。「心理の上から観れば、智愚の別なく人咸く面白味は有る。内海文三の心状を観れば、それは解らう。[注11]…」

文三の精神的なドラマは、彼が貧困から抜け出したいという気持ちにとらわれつつも、同時に全力をつくして自己の人間的尊厳を保持しようとする点にある。そしてこれが彼を社会との衝突に陥れるのである。文三は苦しみ悶えるが、ドストエーフスキイの主人公同様、彼の苦悩は物質的窮乏よりも、むしろ傷つけられた人間的尊厳の耐え難い苦しみによって呼び起されたものである。

「どうしたものだらう？[注12]」この問いが、主人公の生涯のもっとも危機的な瞬間に、彼の心をかき乱す。生活によって辱しめられ、欺かれた人間の秘められた心理の一隅を明らかにするため、二葉亭は小説の複雑な生地に内的独白を導入した。まさしくこれが人格のより深い認識を促し、かつまた文学の主人公の知的レベルの向上を促すのである。

「どうしたものだらう？」文三のこの問いに、あるいは新しい日本文学の

精神的探求の出発点があるのかもしれない。日本最初の写実主義小説とロシア文学、この〈問題文学〉との、更なる深奥のつながりが浮かび上がってくるのである。

（『アジアとアフリカの諸民族』1972年第1号）

注

1．瀬沼茂樹『近代日本の文学——西欧文学の影響——』　東京　1959年　16頁。
2．『日本文学史辞典』　東京　1967〔初版は1954〕年　722頁。
3．『二葉亭四迷全集』　第5巻　217頁。
4．次の個所を参照のこと。「すでにひさしいまえから指摘されているように、ロシヤのもっともすぐれた中編小説や長編小説の主人公たちはすべて生活のなかに目的を見ることができず、適当な事業を見いだすことができないために悩んでいる。その結果として、彼らはあらゆることに退屈と嫌悪とをおぼえ、この点においてオブローモフとの、いちじるしい類似を示している。」（『エス・ア・ドブロリューボフ全集』　第2巻　モスクワ　1935年　17頁）。〔金子幸彦訳『オブローモフ主義とは何か？』　1975年　岩波書店　34頁〕
5．『二葉亭四迷全集』　第5巻　218頁。
6．前掲書　214—215頁。
7．前掲書　219、221頁。
8．前掲書　195頁。
9．『二葉亭四迷全集』　第1巻　193頁。
10．『二葉亭四迷全集』　第5巻　199—200頁。
11．『二葉亭四迷全集』　第1巻　190頁。
12．前掲書　239頁

討議要旨

松本鶴雄氏から、『浮雲』の中では巧利的性格の本田昇が否定されるべき性格の登場人物として評されているが、最近では本田、文三ともに作者の分身であり本田昇の存在を許すことによって作者は文三を批判しているのではないかという意見もあるが、どう思うかとの質問があり、発表者から、読み手によって様々な見方ができるので、そのような意見もありえよう。それはと

もあれ、『浮雲』は日本近代文学の祖的存在でありながら、しかも近代文芸学的方法論で分析可能な構造を持った作品であって、ここでは文三と本田昇とのアンチテーゼは二葉亭の思想を把握する意味で重要なことだと思うとの返答があった。

長谷川泉座長から、日本の近代化の中では鷗外の渡欧、二葉亭のロシア文学からの影響などが大きな意味を持っているが、構造的には徳川幕府の打破によって近代化が始ったことは確かであり、その近代化のもっている性格、あるいは構造の中から日本近代文学の問題が提出されてくると思う。そしてその周辺を詳しくさぐることによって逆に新しく二葉亭をみる視点も浮上してくるだろうとのコメントがあった。

発表者から長谷川座長のコメントを受ける形で、日本文学における近代ということについては様々な問題があるが、日本の近代は宣長、近松あたりにすでに近代的要素が多分に入ってきている。例えば『曽根崎心中』では、自分の内面的性格、人間の本性を守ろうとして犠牲になっていく描写があるが、そういう精神は近代的な精神だと思う。しかし、実質的な文学の近代はやはり二葉亭の『浮雲』にあったというべきである、との発表があった。